1. 実験の目的

細線加熱法による物質の熱伝導率の精密測定が、最近の電子機器の進歩により迅速かつ容 易に行えるようになった.この測定法は,気体,液体,固体と種々の物質について広く用い られている.この実験では,主に液体の熱伝導率測定にこの方法を適応し,測定の原理とマ イクロコンピュータを用いたデータ処理法を習得し,さらにデータに対する不確かさについ て検討する.

2. 測定原理

図1のように,無限に広がった媒体中に置かれた太さの無い無限長さの直線状の熱源(線 状熱源)を仮定する.

熱伝導によって物体内を移動する熱量は,"熱伝導に関するフーリエの法則"を用いて表 すことができる.この法則は熱流に直角な単位面積をとおして,単位時間当たりに流れる熱 流速q[W/m²]は熱流の方向の温度傾斜 $\partial T / \partial r$ [K/m]に比例する,というもので次式で表さ れる.

$$q = -\lambda \frac{\partial T}{\partial r} \quad [\mathbf{W}/\mathbf{m}^2]$$

ただし, r [m]は熱流方向に沿って測った距離であり,熱力学第二法則・熱の流れ一方向性 (熱が高熱源から低熱源へ移動)より図2のように熱流方向に温度傾斜が負になるため,式 の右辺に負の記号を付けてqが正になるようにしてある.

また,比例定数 [W/(m・K)]は熱伝導率と呼ばれ,単位温度傾斜あたりの熱流速の大き さを意味している.したがって,熱の良導体の は大きい値を示す.厳密には は温度の影 響を受けるが,実用上は,温度範囲を限って一定値扱いすることが多い.

このとき,距離r離れた微小体積について,r方向の流入熱量 Qin(単位長さあたり)は フーリエの法則より次式で表され,

 $Q_{in} = q \cdot A$ [W]

ここで,Aは面積[m²]である.面積Aは, $A = 2\pi r \times 1$ [m²]なので,流入熱量Q_{in}は,

$$Q_{in} = -\lambda \frac{\partial T}{\partial r} 2\pi r \tag{1}$$

で表される.



いま, $Q_{in} = Q(r_0)$ とすると,距離roから rだけ離れた場所での熱量 Q_{out} はテーラー 展開より,

$$Q_{out} = Q(r_0 + r) = Q(r_0) + \frac{\partial Q(r_0)}{\partial r} \cdot r + \frac{1}{2!} \frac{\partial^2 Q(r_0)}{\partial r^2} \cdot r^2 + \cdot \cdot \cdot \\ \approx Q_{in} + \frac{\partial Q_{in}}{\partial r} dr \quad [W]$$
(2)

となる .微小体積に流入する熱量と流出する熱量の差は単位時間当たり内部エネルギ上昇を もたらす.

式(3)より単位時間当たりのエネルギ増加量 Qは,

$$Q = Q_{in} - Q_{out} = -\frac{\partial}{\partial r} \left(-\lambda \frac{\partial T}{\partial r} 2\pi r \right) dr = 2\pi \lambda \frac{\partial}{\partial r} \left(r \frac{\partial T}{\partial r} \right) dr$$
 (3)

一方, [加えられた熱量]=[質量]×[比熱]×[温度差] であたられる. 温度差 T[K]は,温度関数 T=T(ro,t)を用いて表すと,

$$T(t_0 + dt) = T(t_0) + \frac{\partial T(t_0)}{\partial t} dt + \frac{1}{2!} \frac{\partial^2 T(t_0)}{\partial t^2} dt^2 + \cdots$$

$$\Leftrightarrow \quad T = T(t_0 + dt) - T(t_0) = \frac{\partial T(t_0)}{\partial t} dt = \frac{\partial T}{\partial t} dt$$

また,密度を [kg/m³],比熱を c [J/(kgK)]とすると,単位時間当たりに加えられた熱量 Q は次式でも表すことができる.

$$Q = \rho \cdot 2\pi r dr \cdot c \cdot \frac{\partial T}{\partial t}$$

したがって,上式と式(3)より熱源からの距離rの点における温度変化が,次の偏微分方程式で表される.

$$2\pi\rho cr\frac{\partial T}{\partial t}dr = 2\pi\lambda\frac{\partial}{\partial r}\left(r\frac{\partial T}{\partial r}\right)dr$$
$$\Leftrightarrow\frac{\partial T}{\partial t} = \frac{\lambda}{\rho c}\frac{1}{r}\frac{\partial}{\partial r}\left(r\frac{\partial T}{\partial r}\right)$$

ここで,熱拡散率(温度伝導率); $\alpha \equiv \frac{\lambda}{\rho c}$ [W/m² K] を用いると,上式は次式となる.

$$\frac{\partial T}{\partial t} = \alpha \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial r} \left(r \frac{\partial T}{\partial r} \right)$$
$$\Leftrightarrow \frac{\partial T}{\partial t} = \alpha \frac{1}{r} \left(\frac{\partial T}{\partial r} + r \frac{\partial^2 T}{\partial r^2} \right)$$
(4)

初期条件
$$t = 0$$
; $T=0$
境界条件 $t > 0$; r で $T=0$ (6)
 $r 0$ で $_{q} = -2\pi r \lambda \frac{\partial T}{\partial r}$

式(4)の偏微分方程式を解くために,相似変数 $_{x=}\frac{r^{2}}{4\alpha t}$ を導入する. T=T(x)を仮定.

$$\begin{cases} \frac{\partial T}{\partial t} = \frac{dT}{dx} \cdot \frac{\partial x}{\partial t} = \frac{dT}{dx} \left(-\frac{r^2}{4\alpha t^2} \right) = -\frac{x}{t} \cdot \frac{dT}{dx} \\ \frac{\partial T}{\partial r} = \frac{dT}{dx} \cdot \frac{\partial x}{\partial r} = \frac{dT}{dx} \cdot \frac{r}{2\alpha t} = \frac{2x}{r} \cdot \frac{dT}{dx} \\ \frac{\partial^2 T}{\partial r^2} = \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{2x}{r} \cdot \frac{dT}{dx} \right) \\ = \frac{2}{r} \frac{dT}{dx} \cdot \frac{\partial x}{\partial r} + 2x \frac{dT}{dx} \cdot \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{1}{r} \right) + \frac{2x}{r} \cdot \frac{\partial}{\partial r} \left(\frac{dT}{dx} \right) \\ = \frac{2}{r} \cdot \frac{r}{2\alpha t} \cdot \frac{dT}{dx} - 2x \cdot \frac{1}{r^2} \cdot \frac{dT}{dx} + \frac{2x}{r} \cdot \frac{d^2 T}{dx^2} \cdot \frac{\partial x}{\partial r} \\ = \frac{4x}{r^2} \cdot \frac{dT}{dx} - \frac{2x}{r^2} \cdot \frac{dT}{dx} + \frac{2x}{r} \cdot \frac{r}{2\alpha t} \cdot \frac{d^2 T}{dx^2} \\ = \frac{4x^2}{r^2} \cdot \frac{d^2 T}{dx^2} + \frac{2x}{r^2} \frac{dT}{dx} \end{cases}$$

これを式(4)に代入すると ,

$$(4) \Leftrightarrow -\frac{x}{t} \cdot \frac{dT}{dx} = \alpha \frac{1}{r} \left[\frac{2x}{r} \cdot \frac{dT}{dx} + r \left(\frac{4x^2}{r^2} \cdot \frac{d^2T}{dx^2} + \frac{2x}{r^2} \cdot \frac{dT}{dx} \right) \right]$$

$$\Leftrightarrow \frac{4x^2 \alpha}{r^2} \cdot \frac{d^2T}{dx^2} + \left(\frac{4\alpha x}{r^2} + \frac{x}{t} \right) \cdot \frac{dT}{dx} = 0$$

$$\Leftrightarrow \frac{d^2T}{dr^2} + \left(\frac{1}{x} + x \cdot \frac{1}{x^2} \frac{r^2}{4\alpha t} \right) = 0$$

$$\Leftrightarrow \frac{d^2T}{dx^2} + \left(1 + \frac{1}{x} \right) \frac{dT}{dx} = 0$$
(5)

初期条件・境界条件は,

$$t = 0, \ \mathfrak{SL} \mathcal{V} r \to \infty \qquad \Rightarrow \qquad x \to \infty \qquad \mathcal{C} \qquad T = 0 \qquad \cdots \\ r \to 0 \qquad \Rightarrow \qquad x \to 0 \qquad \mathcal{C} \qquad q = -\lambda \frac{dT}{dx} \left(\frac{2\pi}{r}\right) \cdot 2\pi r = -4\pi\lambda x \frac{dT}{dx} \qquad \cdots$$

$$\left. \right\}$$

$$(6)'$$

$$p = \frac{dT}{dx} \downarrow 0,$$
$$\frac{dT}{dx} = C_1 \frac{1}{x} e^{-x}$$
$$\Leftrightarrow T = C_1 \int_0^x \frac{1}{x} e^{-x} dx + C_2 \quad [K]$$

(C₂;積分定数)

条件 より,
$$q = -4\pi\lambda x \cdot C_1 \frac{e^{-x}}{x}$$
 $(x \to 0)$

$$\Leftrightarrow C_1 = -\frac{q}{4\pi\lambda}$$
条件 より, $x \to \infty$ で, **T=0**なので,

$$0 = -\frac{q}{4\pi\lambda} \int_0^\infty \frac{1}{x} e^{-x} dx + C_2$$

$$\Leftrightarrow C_2 = \frac{q}{4\pi\lambda} \int_0^\infty \frac{1}{x} e^{-x} dx$$

したがって,得られる T の式は,

$$T = -\frac{q}{4\pi\lambda} \left(\int_{0}^{x} \frac{1}{x} e^{-x} dx - \int_{0}^{\infty} \frac{1}{x} e^{-x} dx \right)$$

$$= \frac{q}{4\pi\lambda} \int_{x}^{\infty} \frac{1}{x} e^{-x} dx$$

ここで,指数積分; $E_i(-x) = -\int_x^{\infty} \frac{1}{x} e^{-x} dx$ (8) を用いると,Tの式は,

$$T = -\frac{q}{4\pi\lambda}E_i(-r^2/4\alpha t) \quad [K]$$
(7)

で表される.q[W/s]は熱源の単位長さあたりの発熱量, [W/(m・K)]は熱伝導率である.

ところで, x が十分小さいとき t が十分大きいとき, e^{-x}はマクローリン展開より, $e^{-x} = e^0 + e^0(-x) + \frac{e^0}{2!}(-x)^2 + \dots \approx 1 - x$

したがって,式(8)は,

$$E_i(-x) = -\int_x^\infty \frac{1}{x} e^{-x} dx$$
$$= -\left[\ln x \cdot e^{-x}\right]_x^\infty - \int_x^\infty \ln x \cdot e^{-x} dx$$

$$= \ln x \cdot e^{-x} - \int_{0}^{\infty} \ln x \cdot e^{-x} dx + \int_{0}^{x} \ln x \cdot e^{-x} dx$$
$$\approx (1 - x) \ln x + \gamma + \int_{0}^{x} (1 - x) \ln x \cdot dx$$
$$= (1 - x) \ln x + \gamma - x + x \ln x - \frac{1}{2} x^{2} \ln x + \frac{1}{4} x^{2}$$
$$\approx \gamma + \ln x$$

ただし, $\gamma = -\int_{0}^{\infty} \ln x \cdot e^{-x} dx = 0.5772 \cdots$:オイラー定数

したがって,熱源の表面温度Tは,

$$T(a,t) = \frac{q}{4\pi\lambda} \left(-\gamma - \ln\frac{a^2}{4\alpha t} \right) = \frac{q}{4\pi\lambda} \left(\ln\frac{4\alpha t}{a^2} - \gamma \right)$$
(9)

ただし, a(≅0) [m]は, 熱源の半径である.

さらに,式(9)をlntで微分すれば,

$$\frac{dT}{d\ln t} = \frac{q}{4\pi\lambda} \cdot \Leftrightarrow \lambda = \frac{q}{4\pi} \Big/ \frac{dT}{d\ln t}$$
(10)

が得られる.式(10)が非定常細線法のの基礎式であり,細線の単位長さあたりの発熱量 q と 細線の温度の時間変化 $dT/d \ln t$ を測定することにより,熱伝導率 が得られる.

3. 装置と機器

試料 スピンドル油

タングステン細線 (5[µm], 長さ 40.90[mm]), 熱電対, ホイーストンブリッジ回路, コンピュータ

4. 測定装置とデータ処理

4.1 測定装置

式(10)を用いて実際に熱伝導率を測定するには,可能な限り小さい径の細線を用い,その 長さを直径に比べて十分長く取る必要がある.そして,試料容器はその壁が細線の温度上昇 に影響を及ぼさない程度に大きくし,これら全体を一定温度に保つ必要がある.測定装置を 図3に示す.今回の実験で使用する試料にはスピンドル油を用いる.また使用する細線は, 直径5µmのタングステン線で長さは約40mmで直径の8000倍以上とられており,試料 容器全体が恒温層の中に浸される.試料容器も今回は円管形であるものを用い,直径は約 30mmとこちらもタングステン線の直径の6000倍程度となっている.

細線の時間的な温度上昇を求めるのには,図4に示す測定回路が用いられる.加熱細線の 抵抗 R と抵抗 P, Q, R,S からなるホイーストンブリッジ回路 ACBD について,CD 間の電位 差 V は次式で定義される.

$$V = E\left(\frac{Q}{P-S} - \frac{S}{R+S}\right)$$
(11)

スイッチ S1を抵抗r2側にし,水銀リレーを閉じてブリッジに電位差を与えると抵抗 R が発熱を始め,それに伴って細線の温度,したがって電気抵抗地が変化する.細線の電気抵 抗 Rの温度による変化が,

$$R = R_0 (1 + \beta \quad T) = R_0 + R \tag{12}$$

で表され(R_0 は温度 T_0 における電気抵抗値, T は T_0 からの温度差, は電気抵抗の温 度係数である), $R/(R_0+S)$ 1とみなすと,式(11)を温度で微分して,

$$\frac{dV}{dT} \approx ES \cdot \frac{dR}{dT} / (R_0 + S)^2$$
(13)

が得られる .また細線の単位長さあたりの発熱量 q は ,抵抗 R を流れる電流を i ,長さを *l* として ,

$$q = \frac{Ri^2}{l} = \frac{R}{l} \left(\frac{E}{R+S}\right)^2 \approx \frac{R_0}{l} \left(\frac{E}{R_0+S}\right)^2$$
(14)

で表されるので,式(10)の温度を, $\frac{dV}{d\ln t} = \frac{dV}{dT} \cdot \frac{dT}{d\ln t}$ の関係で電位差に変換し,式(13),(14) を代入すれば,

$$\lambda = \frac{q}{4\pi} \cdot \frac{dV}{dT} / \frac{dV}{d\ln t} \approx \frac{R_0 S E^3}{4\pi l (R_0 + S)^4} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
(15)

が得られる.結局細線の温度変化がブリッジ回路の不平衡電位差の変化に置き換えられる.





4.2 データの取り込みと処理

ブリッジの不平衡電圧は,直流増幅させた後 A/D 変換(アナログ/デジタル変換)される.本実験では,分解能 12 ビット,変換電圧範囲 0~5Vの A/D 変換器を用いる.入力チャンネルは2つあり,第1チャンネル(Ch1)をブリッジの不平衡電圧 Vの測定,第2チャンネル(Ch2)をブリッジ電圧 Eの測定(この電圧は変換電圧範囲を超えることがあるので,実際の測定では r₃, r₄により分圧された電圧を測定する)および変換開始信号(トリガ)に用いる.A/D 変換器は 0V を&H0000(0)に,5V を&H0FFF(4095)に変換する.不平衡電圧の増幅率は,出力が 5V を超えない範囲でなるべく大きく設定する.また,A/D 変換された信号はパソコンのメモリに直接転送される(DMA 転送).

5. 測定

5.1 測定手順

以下の手順で,異なる試料温度について測定を繰り返す.

熱電対の出力をデジタルマノメータ(DMM)で測定し,試料容器内の温度が一様であることを確認する.

スイッチ S1を開放にして,細線の抵抗 R と抵抗 S を DMM により測定する.

スイッチ S1を抵抗 r1側にし,ブリッジに微小電流を流して,不平衡電位差 V が 0V(増幅器の出力わ DMM で確認する)になるように可変抵抗 P を調整する.

A/D 変換器の準備が整っていることを確認した後,スイッチ Si を抵抗r2側にし,水銀 リレースイッチを閉じて(2~3秒間),不平衡電位差 V とブリッジ電圧 E をコンピュ ータのメモリに記憶する.このとき,前述の測定原理の通り,tが微小な時の温度すな わち熱電対の起電力を測定する.実際にはtは零近傍は避け,0.01[s]から1[s]までの起 電力を0.001[s]の間隔で記録する。

グラフを描画して適当な結果が得られていることを確認し,データをハードディスクに 保存する.

プログラム(リスト1・p.9)を実行させ,データの確認とデータの読み出しを行い, 測定を終える.ただし,取り得た値は1000個にのぼる.この測定では得た値の傾きを 求めることが目的なので,作業の簡略化のために1000個の値から等間隔に25個の値 を取り出す。このとき傾きは, V[mV]と logtの商となっているため一つの時間間隔 が10^{1/12}[s]となることに注意が必要である. ***Sample Program***

- 10 NDATA=1000:NOUT=25:0.001
- 20 CREEN 3: CLS 3: LINE(0,0)-(639,399),,B
- **30** DIM TIME(NDATA),V(NDATA),E(NDATA)
- 40 OPEN "File_name" FOR INPUT AS #1
- 50 FOR I%=1 TO NDATA
- 60 INPUT #1, TIME(I%),V(I%),E(I%)
- 70 NEXT I%
- 80 CLOSE
- **90 FOR J%=0 TO Nout-1**
- 100 T=10^(J%/12-2)
- 110 N%=1000*T
- 120 X%=LOG(N%)/LOG(10)*640/4
- 130 Y1%=-V(N%)*400/5+400
- 140 Y2%=-E(N%)*400/5+400
- 150 PSET(X%, Y1%): PSET(X%, Y2%)
- 160 'LPRINT USING " ###.####"; TIME(N%),V(N%),E(N%)
- 170 NEXT J%

リスト1 データ処理プログラム

5.2 測定結果

<測定1>常温(室温状態)での熱伝導率の測定 熱伝導率を測定するために,恒温槽温度・不平衡電位差 V・ブリッジ電圧 E を測定する.

(1) 恒温槽温度 T₁の測定

熱電対を用いて発生する電位差を測定し,測定した起電力より温度を求める. P.7・図3にもあるように,温度測定は細線の上下2ケ所で測定し,2つの平均値を恒温槽温度 T₁とする.なお,この熱電対の起電力 e[mV]と温度 T[]の関係は,式(16)となっている.

$$T = 25.567e - 0.2860e^2$$

(16)

測定起電力

熱電対1(上)	0.904 [mV]
熱電対2(下)	0.912 [mV]

温度

22.88	[]	
23.08	[1	

したがって, [恒温槽温度 T₁] = $\frac{22.88 + 23.08}{2}$ = 22.98 []

(2) ブリッジ抵抗と加熱細線抵抗(R01)の測定

ブリッジ抵抗	加熱細線抵抗(Ro1)
2.0057 [k]	181.58 []

(3) 不平衡電位差 V[V]とブリッジ電圧 E[V]の測定

不平衡電位差 V・ブリッジ電圧 E を測定する際,測定器は 0~5[V]の範囲でしか適正に電 圧の測定が行えない.そのため,電圧を増幅器を用いて,増幅および減衰させ適正範囲内に おさめて測定することになる.したがって,以下に変換倍率および不平衡電位差 V とブリ ッジ電圧 E の測定値と変換値を示す.

● CH1の内容: [不平衡電位差 V]×[増幅器倍率]×[AD 変換精度(=1)]
 = [不平衡電位差 V]×[出力電圧]/[校正入力電圧]×1

[増幅器倍率] = [出力電圧] / [校正入力電圧] = [1.332 V] / [1.257 mV]=1060

● CH 2 の内容: [ブリッジ電圧 E]×[減衰率]×[AD 変換精度(=1)]
 = [ブリッジ電圧 E]×[出力電圧]/[校正入力電圧]×1

[減衰率] = [出力電圧] / [校正入力電圧] = [2.566 V] / [10.125 V]=0.2534

常温における不平衡電位差 V とブリッジ電圧 E の測定値,および前述の増幅率・減衰率 を用いて増幅器による変換前の値を表1に示す.

また,表1よりブリッジ電圧 Eの平均値は,

$$\overline{E}_1 = \frac{\sum E}{n} = 14.5676$$
 [V]

表1 常温における不平衡電位差 V とブリッジ電圧 E

時間 t [s]	CH1 [V]	不平衡電位	ī差V [V]	CH2 [V]	ブリッジ電圧E [V]
0.010	1.81396	1.71182	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.012	1.88965	1.78325	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.015	1.99463	1.88232	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.018	2.07764	1.96066	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.022	2.17285	2.05050	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.026	2.24609	2.11962	× 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.032	2.34619	2.21408	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.038	2.42676	2.29012	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.046	2.51709	2.37536	x 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.056	2.60742	2.46061	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.068	2.69287	2.54124	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.083	2.78320	2.62649	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.100	2.86377	2.70252	x 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.121	2.96387	2.79699	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.147	3.05420	2.88223	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.178	3.13965	2.96287	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.215	3.22998	3.04811	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.261	3.31543	3.12875	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.316	3.40332	3.21169	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.383	3.49121	3.29463	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.464	3.57666	3.37527	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.562	3.66943	3.46282	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.681	3.75977	3.54807	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.825	3.84766	3.63101	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
1.000	3.92822	3.70704	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657

<測定2>恒温槽を過熱した際の熱伝導率の測定

測定1と同様に,恒温槽温度・不平衡電位差V・ブリッジ電圧Eを測定する.

(1) 恒温槽温度 T₂の測定

測定1同様に,熱電対の起電力を測定し,式(16)を用いて温度を求め,2つの温度の平均 値を恒温槽温度T₂とする.

測定	起電力		
	熱電対1(上)	2.211	[mV]
	熱電対2(下)	2.232	[mV]

温度

55.13	[]	
55.64	[]	

したがって, [恒温槽温度 T₂] = $\frac{55.13 + 55.64}{2}$ = 55.39 []

(2) ブリッジ抵抗と加熱細線抵抗(R₀₂)の測定

ブリッシ	が抵抗	ì
2.0039	[k]

加熱細線抵抗(Ro2)				
199.96	[]		

(3) 不平衡電位差 V[V]とブリッジ電圧 E[V]の測定

CH1, CH2における増幅器による増幅率および減衰率は,測定1における増幅率と減 衰率と同値を用いる.

● CH1:[増幅器倍率]=[出力電圧]/[校正入力電圧]=[1.332 V]/[1.257 mV]=1060

● CH2: [減衰率] = [出力電圧] / [校正入力電圧] = [2.566 V] / [10.125 V]=0.2534 加熱温度における不平衡電位差 V とブリッジ電圧 E の測定値,および前述の増幅率・減 衰率を用いて増幅器による変換前の値を表 2 (p.12)に示す.

また,表1(p.10)よりブリッジ電圧 Eの平均値は,

$$\overline{E}_2 = \frac{\sum E}{n} = 14.5641$$
 [V]

時間 t [s]	CH1 [V]	不平衡電位	差V [V]	CH2 [V]	ブリッジ電圧E [V]
0.010	2.25342	2.12654	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.012	2.34863	2.21639	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.015	2.45605	2.31776	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.018	2.56103	2.41683	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.022	2.68555	2.53434	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.026	2.76123	2.60576	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.032	2.87353	2.71173	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.038	2.96410	2.79720	× 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.046	3.07617	2.90296	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.056	3.16406	2.98590	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.068	3.26172	3.07806	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.083	3.36670	3.17713	× 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.100	3.43994	3.24625	× 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.121	3.55957	3.35914	x 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.147	3.65234	3.44669	x 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.178	3.74756	3.53655	× 10 ⁻³	3.69385	14.5753
0.215	3.83789	3.62179	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.261	3.93310	3.71164	x 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.316	4.03320	3.80611	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.383	4.11621	3.88444	× 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.464	4.20654	3.96969	x 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.562	4.29688	4.05494	× 10 ⁻³	3.68897	14.5560
0.681	4.38477	4.13788	x 10 ⁻³	3.69141	14.5657
0.825	4.46045	4.20930	x 10 ⁻³	3.69141	14.5657
1.000	4.53125	4.27611	× 10 ⁻³	3.68897	14.5560

表2 加熱温度における不平衡電位 V とブリッジ電圧 E

5.3 測定結果より熱伝導率の算出

(1) $\frac{dR}{dT}$ の算出

5.1節・測定1,測定2の(1),(2)で測定した,恒温槽温度と加熱細線抵抗の値を 用いて,抵抗Rの温度Tに対する変化(*dR/dT*)を調べる.

測定結果より,恒温槽温度T[K]と加熱細線抵抗Ro[]は,表3の通りである.

次 5 但無相通及C加熱詞該通及の例定但				
	恒温槽温度 T [K]	加熱細線抵抗 R_o []	
測定1	296.1	181.58		
測定2	328.5	199.96		

耒3 「石涅樺涅度と加熱細線涅度の測定値

抵抗 R を温度 T で微分した値を差分で求めると,変化の割合は,

$$\frac{dR}{dT} = \frac{R_{02} - R_{01}}{T_2 - T_1} = \frac{328.5 - 296.1}{199.96 - 181.58} = 0.5671 \text{ [} \text{/K]}$$

$$T_2 - T_1 = 199.96 - 181.58$$

である.図5(p.13)に、この傾きを示したグラフを示す.



(2)
$$\frac{dV}{d\ln t}$$
の算出と $\ln(t)$ -Vグラフ

<測定1>

5.1節(3)で測定した不平衡電位差 V[V]と時間 t [s]より, V と ln(t)を表にまとめた ものを表4(p.14)に示す.ここで, ln(t)と V が一次比例すると仮定すると, ln(t)と V は 次式のように書ける.

$$V = a \ln t + b$$
 (a,b は定数) (17)

ところで, *y* = *ax* + *b* において,最小二乗法で近似直線を求める際, *a*,*b* は次式で求められる.

$$a = \frac{n\sum xy - \sum x\sum y}{n\sum x^2 - (\sum x)^2}$$
(18)

$$b = \frac{\sum x^2 \sum y - \sum x \sum xy}{n \sum x^2 - (\sum x)^2}$$
(19)

ただし,nは測定値の個数である.

したがって,式(18),(19)より a,b は次の式で求められる.
$$a = \frac{n\sum V \ln t - \sum \ln t \sum V}{n\sum (\ln t)^2 - (\sum \ln t)^2}$$
(18)

$$b = \frac{\sum (\ln t)^2 \sum V - \sum \ln t \sum V \ln t}{n \sum (\ln t)^2 - (\sum \ln t)^2}$$
(19)

表4に加えて $(\ln t)^2$ と, $V \ln t$ を示しておく.

表4の値より a,b の値は次の通りである.

(18)'
$$a = \frac{n\sum V \ln t - \sum \ln t \sum V}{n\sum (\ln t)^2 - (\sum \ln t)^2}$$
$$= \frac{25 \times -135.167932 \times 10^{-3} + 57.5330 \times 67.76606 \times 10^{-3}}{25 \times 180.1243577 - (-57.5330)^2}$$
$$= 4.35506 \times 10^{-4} \quad [V]$$

(19)'
$$b = \frac{\sum (\ln t)^2 \sum V - \sum \ln t \sum V \ln t}{n \sum (\ln t)^2 - (\sum \ln t)^2}$$
$$= \frac{180.1243577 \times 67.76606 \times 10^{-3} - 57.5330 \times 135.167932 \times 10^{-3}}{25 \times 180.1243577 - (-57.5330)^2}$$
$$= 3.71288 \times 10^{-3} \text{ [V]}$$

よって、 $V = 4.355 \times 10^{-4} \ln t + 3.713 \times 10^{-3}$ [V] 式(20)をグラフにしたものを図6(p.15)に示す.

時間 t [s] 不平衡電位差 V [V] V*ln(t) [V] $[ln(t)]^{2}$ ln(t) 1.71182 -7.883234459 × 10⁻³ 0.010 × 10⁻³ -4.605170186 21.20759244 <u>× 1</u>0⁻³ <u>× 1</u>0⁻³ 0.012 1.78325 -4.422848629 19.56159 -7.887048304 0.015 1.88232 -4.199705078 17.63752274 -7.905187822 × 10⁻³ × 10⁻³ × 10⁻³ 0.018 1.96066 <u>×</u>10⁻³ -4.017383521 16.13937036 -7.876706164 <u>× 1</u>0⁻³ × 10⁻³ 0.022 2.05050 -3.816712826 14.56729679 -7.826188131 <u>× 1</u>0⁻³ 0.026 -3.649658741 13.32000893 -7.735893195 2.11962 × 10⁻³ <u>× 10</u>⁻³ 0.032 2.21408 × 10⁻³ -3.442019376 11.84749739 -7.620922463 2.29012 -3.270169119 10.69400607 -7.489073517 0.038 × 10⁻³ $\times 10^{-3}$ × 10⁻³ <u>×</u>10⁻³ -3.079113882 0.046 2.37536 9.480942301 -7.314010 <u>× 10</u>-3 × 10⁻³ 0.056 2.46061 -2.88240 8.308250446 -7.092459018 2.54124 <u>× 10⁻³</u> × 10⁻³ 0.068 -2.688247574 7.226675018 -6.831494192 × 10⁻³ 0.083 2.62649 × 10⁻³ -2.488914671 6.19469624 -6.537105234 <u>× 10⁻³</u> <u>× 1</u>0⁻³ 0.100 2.70252 -2.302585093 5.30189811 -6.222786155 <u>× 1</u>0⁻³ 0.121 2.79699 <u>×10</u>-3 -2.111964733 4.460395035 -5.907134584 0.147 2.88223 -1.917322692 3.676126306 -5.526163601 × 10⁻³ × 10⁻³ × 10⁻³ × 10⁻³ 0.178 2.96287 -1.725971729 2.978978408 -5.113826241 × 10⁻³ 0.215 3.04811 -1.537117251 2.362729443 -4.685305164 $\times 10^{-3}$ <u>× 10</u>-3 0.261 3.12875 × 10⁻³ -1.343234872 1.80427992 -4.202646619 -3.69991071 <u>× 10</u>⁻³ 0.316 3.21169 -1.152013065 1.327134103 × 10⁻³ × 10⁻³ 0.383 3.29463 × 10⁻³ -0.95972029 0.921063035 -3.161926004 <u>× 1</u>0⁻³ 0.464 3.37527 -0.767870727 0.589625453 -2.591772169 × 10⁻³ 0.562 3.46282 <u>×10⁻³</u> -0.576253429 0.332068015 -1.995460718 $\times 10^{-3}$ <u>× 10</u>⁻³ 3.54807 <u>× 10⁻³</u> -0.384192973 0.14760424 -1.363144037 0.681 <u>×10⁻³</u> -0.192371893 0.037006945 -0.698504743 × 10⁻³ 0.825 3.63101 <u>× 1</u>0⁻³ 1.000 3.70704 × 10⁻³ 0 0 合計 -57.5330 180.1243577 -135.1679032 × 10⁻³ 67.76808 × 10⁻³

表4 不平衡電位差 V と ln(t)

(20)



式(20)より ,
$$\frac{dV}{d\ln t} = 4.355 \times 10^{-4}$$
 [V]

測定1と同様に
$$\frac{dV}{d \ln t}$$
を求める.
式(17)において, a,b の値は表5 (p.16)より,
(18)' $a = \frac{n\sum V \ln t - \sum \ln t \sum V}{n\sum (\ln t)^2 - (\sum \ln t)^2}$
 $= \frac{25 \times -164.16182 \times 10^{-3} + 57.5330 \times 81.13113 \times 10^{-3}}{25 \times 180.1243577 - (-57.5330)^2}$
 $= 4.725 \times 10^{-4}$ [V]
(19)' $b = \frac{\sum (\ln t)^2 \sum V - \sum \ln t \sum V \ln t}{n\sum (\ln t)^2 - (\sum \ln t)^2}$
 $= \frac{180.1243577 \times 81.13113 \times 10^{-3} - 57.5330 \times 164.16182 \times 10^{-3}}{25 \times 180.1243577 - (-57.5330)^2}$
 $= 4.333 \times 10^{-3}$ [V]

$$V = 4.725 \times 10^{-4} \ln t + 4.333 \times 10^{-3}$$
 [V] (21)

したがって、
$$\frac{dV}{d\ln t} = 4.725 \times 10^{-4}$$

時間 t [s] 不平衡電位差V [V V*ln(t) [V] In(t) $[ln(t)]^{2}$ 21.20759244 0.010 2.12654 × 10⁻³ -4.605170186 -9.793070517 × 10⁻³ <u>× 10⁻³</u> 0.012 2.21639 -4.422848629 19.56159 -9.802745619 × 10⁻³ × 10⁻³ <u>× 1</u>0⁻³ 17.63752274 -9.733903806 0.015 2.31776 -4.199705078 <u>×</u>10⁻³ 0.018 2.41683 × 10 -4.017383521 16.13937036 -9.70932442 0.022 2.53434 <u>× 10⁻³</u> -3.816712826 14.56729679 -9.672835002 <u>× 10⁻³</u> 0.026 <u>× 10⁻³</u> 2.60576 <u>×10⁻³</u> -3.649658741 13.32000893 -9.510117746 <u>× 1</u>0⁻³ 0.032 2.71173 -3.442019376 11.84749739 -9.333834568 $\times 10^{-3}$ <u>× 10⁻³</u> <u>× 10⁻³</u> 0.038 2.79720 -3.270169119 10.69400607 -9.147325162 0.046 2.90296 × 10⁻ -3.079113882 9.480942301 -8.938551 × 10[°] <u>× 1</u>0⁻ <u>× 10⁻³</u> 0.056 2.98590 -2.88240 8.308250446 -8.606578872 <u>× 10⁻³</u> -8.274599678 × 10⁻³ 0.068 3.07806 -2.688247574 7.226675018 0.083 3.17713 -2.488914671 6.19469624 -7.907614326 <u>× 10⁻³</u> $\times 10^{-3}$ <u>× 10⁻³</u> <u>× 10⁻³</u> 0.100 3.24625 -2.302585093 5.30189811 -7.474766132 × 10⁻³ <u>× 1</u>0⁻³ 0.121 -2.111964733 4.460395035 -7.094393158 3.35914 -6.608417382 <u>× 1</u>0⁻³ 0.147 3.44669 × 10⁻³ -1.917322692 3.676126306 0.178 3.53655 -1.725971729 2.978978408 -6.10398314 -3 <u>× 1</u>0 × 10 × 10⁻³ 0.215 3.62179 -1.537117251 2.362729443 -5.567119869 $\times 10^{-3}$ × 10⁻³ <u>× 10⁻³</u> 0.261 3.71164 -1.343234872 1.80427992 -4.985606518 0.316 -1.152013065 1.327134103 -4.384683155 -3 3.80611 × 10 × 10 <u>× 1</u>0⁻³ 0.383 3.88444 -0.95972029 0.921063035 -3.727977244 × 10⁻³ × 10⁻³ 0.464 3.96969 <u>×10⁻³</u> -0.767870727 0.589625453 -3.048205113 <u>× 1</u>0⁻³ 0.562 4.05494 $\times 10^{-3}$ -0.576253429 0.332068015 -2.3366722494.13788 -0.3841929730.14760424 -1.589744341 × 10⁻³ 0.681 × 10⁻³ × 10⁻³ 0.825 -0.192371893 0.037006945 -0.809750726 4.20930 × 10 <u>× 1</u>0⁻³ 1.000 4.27611 × 10[°] 0 0 0 -57.5330 180.1243577 -164.16182 合計 81.13113 × 10⁻³ × 10⁻³

表5 負抵抗電位差 V と ln(t)

式(21)をグラフにしたものを図7に示す.



(3) 熱伝導率の算出

(1),(2)および5.1節の<測定1>の結果より,以上の表6のパラメータの値が得られた.

加熱線抵抗 R ₀	181.58 []
ブリッジ抵抗 S	2005.7 []
ブリッジ電圧 E	14.5676 [V]
細線長さ1	0.04090 [m]
dR/dT	0.5671 [/K]
dV/dlnt	4.355 × 10 ⁻⁴ [V]

表6 測定1のR₀,S,E,1,dR/dT,dV/dIntの値

表6の値を式(15)に代入すると熱伝導率が得られる.

$$(15) \Leftrightarrow \lambda_{1} = \frac{R_{0}SE^{3}}{4\pi l(R_{0}+S)^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= \frac{181.58 \times 2005.7 \times 14.5676^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (181.58 + 2005.7)^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}}$$
$$= 0.1246 \quad [W/(m \cdot K)]$$

同様に測定2では,表7のパラメーターとなり,これを式(15)に代入すると次のようになる.

$$(15) \Leftrightarrow \lambda_{2} = \frac{R_{0}SE^{3}}{4\pi l(R_{0}+S)^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= \frac{199.96 \times 2003.9 \times 14.5641^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (199.96 + 2003.9)^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}}$$
$$= 0.1225 \quad [W/(m \cdot K)]$$

表7	測定 2 の R₀ , S , E	, 1 , dR / dT	, dV/dlnt の値
	加熱線抵抗 Ro	199.96	

加去公众水力认为几 几0	199.90 []
ブリッジ抵抗 S	2003.9 []
ブリッジ電圧 E	14.5641 [V]
細線長さ1	0.04090 [m]
dR/dT	0.5671 [/K]
dV/dlnt	4.725×10^{-4} [V]

以上(3)より,恒温槽温度Tと熱伝導率の関係は表8のようになる.

れる 「「一個加及」 「二次因等牛			
恒温槽温度 T [K] 熱伝導率 [W/(m·K		熱伝導率 [W/(m·K)]	
測定1 296.1		0.1246	
測定2	328.5	0.1225	

表8 恒温槽温度 T と熱伝導率

6. 不確かさの検討

= +

あらゆる計測データには誤差が含まれている.ここで,誤差とは測定値から真の値を引いた差である.その誤差 は一定の偏り誤差 と測定ごとにばらつく偶然誤差 から成り立っている.すなわち,

である.ところで,我々が行う計測ではほとんどの場合で真値が未知であり, を直接求めることは不可能である.従って,誤差は推定せざるを得ず,推定ゆえにその値は誤差とは言わず,不確かさという.不確かさ解析はどの実験でも必ず行わなければならない.ここでは,熱伝導率の測定に伴う不確かさ解析を行うため,まず誤差要因の各要素誤差の推定をする必要がある.表9に各測定パラメータの正確度および精密度を示す.これらから, に対する総括正確度および総括精密度を誤差伝播側に基づき算出する.

表9 正確度 Biおよび精密度 Siの値

No.	パラメータ	B_i	S_i
1	Ro	0.15 Ω	0.26 Ω
2	S	0.15 Ω	0.26 Ω
3	E	0.003 V	0.007 V
4	1	0.05 mm	0.10 mm
5	dR/dT	0.001 Ω/K	0.002 Ω/K
6	$dV/d\ln t$	0.15 µV	0.31 µV

(1) 不確かさの計算式

不確かさ区間の計算は次式で求められる.

$$\lambda_{rRss} = \sqrt{B_r^2 + (tS_r)^2}$$
 (22)

この式は約 95%の包括度を持つ.ここでtはスチューデントのtであり,今回はt=2とする.また,Brは総括正確度,Srは総括精密度である.

総括正確度 B, および総括精密度 S, は, 次式で求められる.

$$B_r = \sqrt{\sum_{i}^{T} (\theta_i \cdot B_i)^2}$$
 (23)

$$S_r = \sqrt{\sum_{i}^{T} (\theta_i \cdot S_i)^2}$$
(24)

ここでTはパラメータの数であり、今回の実験では表 10 にも示したとおりT = 6である.

また θ_i は感度係数であり,次式で表される.

$$\theta_i = \frac{\partial \lambda}{\partial P_i} \qquad (P_i : 各パラメータ)$$
(25)

ただし, R₀, S については に関する偏微分が困難なため次式を用いて算出する.

$$\theta_i = \frac{\partial \lambda}{\partial P_i} = \left[\lambda \left(P_i + P_i\right) - \lambda \left(P_i - P_i\right)\right]/2 \quad P_i$$
(26)

(2) 感度 θ_i

式(25),(26)を用いて各パラメータの感度を求める. ここで各パラメータに代入する数値は表6,表7および表9(p.18)の値である.

$$\begin{aligned} < \mathbf{\mathcal{M}}\mathbf{\widehat{z}} \mathbf{1} > \\ \theta_{R_{0}} &= \left\{ \frac{\left(R_{0} + S_{\overline{R_{0}}}\right)SE^{3}}{4\pi l\left[\left(R_{0} + S_{\overline{R_{0}}}\right) + S\right]^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t} - \frac{\left(R_{0} - S_{\overline{R_{0}}}\right)SE^{3}}{4\pi l\left[\left(R_{0} + S_{\overline{R_{0}}}\right) + S\right]^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t} \right\} \right| / 2S_{\overline{R_{0}}} \\ &= \left\{ \frac{\left(181.58 + 0.26\right) \times 2005.7 \times 14.5676^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times \left[(181.58 + 0.26) + 2005.7\right]^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}} \right. \\ &- \frac{\left(181.58 - 0.26\right) \times 2005.7 \times 14.5676^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times \left[(181.58 - 0.26) + 2005.7\right]^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}} \right\} \times \frac{1}{2 \times 0.26} \\ &= \mathbf{4}.584 \times \mathbf{10}^{-4} \quad \left[\mathbf{W}/(\mathbf{mK})\right] \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \theta_{S} &= \left\{ \frac{R_{0} \left(S + S_{\overline{S}}\right) E^{3}}{4\pi l \left[R_{0} + \left(S + S_{\overline{S}}\right)\right]^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} \middle/ \frac{dV}{d \ln t} - \frac{R_{0} \left(S - S_{\overline{S}}\right) E^{3}}{4\pi l \left[R_{0} + \left(S + S_{\overline{S}}\right)\right]^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} \middle/ \frac{dV}{d \ln t} \right\} \middle/ 2S_{\overline{S}} \right. \\ &= \left\{ \frac{181.58 \times (2005.7 + 0.26) \times 14.5676^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times [181.58 + (2005.7 + 0.26)]^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}} - \frac{181.58 \times (2005.7 - 0.26) \times 14.5676^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times [181.58 + (2005.7 - 0.26)]^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}} \right\} \times \frac{1}{2 \times 0.26} \right\} \end{aligned}$$

$$= -1.657 \times 10^{-4}$$
 [W/(mK)]

$$\theta_{E} = \frac{\partial \lambda}{\partial E} = \frac{3R_{0}SE^{2}}{4\pi l(R_{0} + S)^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= \frac{3 \times 181.58 \times 2005.7 \times 14.5676^{2}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (181.58 + 2005.7)^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}}$$
$$= 0.02565 \quad [W/(VmK)]$$

$$\theta_{l} = \frac{\partial \lambda}{\partial l} = -\frac{R_{0}SE^{3}}{4\pi l^{2}(R_{0}+S)^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= -\frac{181.58 \times 2005.7 \times 14.5676^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090^{2} \times (181.58 + 2005.7)^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.355 \times 10^{-4}}$$
$$= -3.046 \quad [W/(m^{2}K)]$$

$$\theta_{\frac{dR}{dT}} = \frac{\partial \lambda}{\partial (dR/dT)} = \frac{R_0 SE^3}{4\pi l (R_0 + S)^4} \cdot 1 / \frac{dV}{d \ln t}$$
$$= \frac{181.58 \times 2005.7 \times 14.5676^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (181.58 + 2005.7)^4} \cdot \frac{1}{4.355 \times 10^{-4}}$$
$$= 0.2197 \quad [W/(m)]$$

$$\theta_{\frac{dV}{d\ln t}} = \frac{\partial\lambda}{\partial(dV/d\ln t)} = -\frac{R_0 S E^3}{4\pi t (R_0 + S)^4} \cdot \frac{dR}{dT} / \left(\frac{dV}{d\ln t}\right)^2$$
$$= -\frac{181.58 \times 2005.7 \times 14.5676^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (181.58 + 2005.7)^4} \cdot \frac{0.5671}{(4.355 \times 10^{-4})^2}$$
$$= -286.0 \quad [W/(VmK)]$$

$$\begin{aligned} < \mathbf{\mathcal{ME 2}} > \\ \theta_{R_0} &= \left\{ \frac{\left(R_0 + S_{\overline{R_0}}\right)SE^3}{4\pi d\left[\left(R_0 + S_{\overline{R_0}}\right) + S\right]^4} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t} - \frac{\left(R_0 - S_{\overline{R_0}}\right)SE^3}{4\pi d\left[\left(R_0 + S_{\overline{R_0}}\right) + S\right]^4} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t} \right\} \right/ 2S_{\overline{R_0}} \\ &= \left\{ \frac{(199.96 + 0.26) \times 2003.9 \times 14.5641^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times \left[(199.96 + 0.26) + 2003.9\right]^4} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}} \right. \\ &- \frac{(199.96 - 0.26) \times 2003.9 \times 14.5641^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times \left[(199.96 - 0.26) + 2003.9\right]^4} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}} \right\} \times \frac{1}{2 \times 0.26} \\ &= 3.904 \times 10^{-4} \quad \left[W/(\ mK) \right] \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \theta_{s} &= \left\{ \frac{R_{0} \left(S + S_{\overline{s}}\right) E^{3}}{4\pi d \left[R_{0} + \left(S + S_{\overline{s}}\right)\right]^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} \middle/ \frac{dV}{d \ln t} - \frac{R_{0} \left(S - S_{\overline{s}}\right) E^{3}}{4\pi d \left[R_{0} + \left(S + S_{\overline{s}}\right)\right]^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} \middle/ \frac{dV}{d \ln t} \right\} \middle/ 2S_{\overline{s}} \right. \\ &= \left\{ \frac{199.96 \times (2003.9 + 0.26) \times 14.5641^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times \left[199.96 + (2003.9 + 0.26)\right]^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}} \right. \\ &- \frac{199.96 \times (2003.9 - 0.26) \times 14.5641^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times \left[199.96 + (2003.9 - 0.26)\right]^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}} \right\} \times \frac{1}{2 \times 0.26} \\ &= -1.613 \times 10^{-4} \quad [W/(-mK)] \end{aligned}$$

$$\theta_{E} = \frac{\partial \lambda}{\partial E} = \frac{3R_{0}SE^{2}}{4\pi l(R_{0} + S)^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= \frac{3 \times 199.96 \times 2003.9 \times 14.5641^{2}}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (199.96 + 2003.9)^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}}$$
$$= 0.02524 \quad [W/(VmK)]$$

$$\theta_{l} = \frac{\partial \lambda}{\partial l} = -\frac{R_{0}SE^{3}}{4\pi l^{2}(R_{0}+S)^{4}} \cdot \frac{dR}{dT} / \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= -\frac{199.96 \times 2003.9 \times 14.5641^{3}}{4 \times \pi \times 0.04090^{2} \times (199.96 + 2003.9)^{4}} \cdot \frac{0.5671}{4.725 \times 10^{-4}}$$
$$= -2.996 \quad [W/(m^{2}K)]$$

$$\begin{aligned} \theta_{\frac{dR}{dT}} &= \frac{\partial \lambda}{\partial (dR/dT)} = \frac{R_0 SE^3}{4\pi l (R_0 + S)^4} \cdot 1 / \frac{dV}{d \ln t} \\ &= \frac{199.96 \times 2003.9 \times 14.5641^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (199.96 + 2003.9)^4} \cdot \frac{1}{4.725 \times 10^{-4}} \\ &= \mathbf{0.2161} \quad [W/(m)] \end{aligned}$$

$$\theta_{\frac{dV}{d\ln t}} = \frac{\partial\lambda}{\partial(dV/d\ln t)} = -\frac{R_0 SE^3}{4\pi l(R_0 + S)^4} \cdot \frac{dR}{dT} / \left(\frac{dV}{d\ln t}\right)^2$$
$$= -\frac{199.96 \times 2003.9 \times 14.5641^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (199.96 + 2003.9)^4} \cdot \frac{0.5671}{(4.725 \times 10^{-4})^2}$$
$$= -259.3 \quad [W/(VmK)]$$

以上,感度をまとめると,表10のとおりである.

	測定 1	測定 2
1	4.584 × 10 ⁴ [W/(mK)]	3.904×10^{-4} [W/(mK)]
2	-1.657 × 10 ⁴ [W/(mK)]	-1.613 × 10 ⁴ [W/(mK)]
3	0.02565 [W/(VmK)]	0.02524 [W/(VmK)]
4	- 3.046 [W/(m ² K)]	- 2.996 [W/(m ² K)]
5	0.2197 [W/(m)]	0.2161 [W/(m)]
6	- 286.0 [W/(VmK)]	- 259.3 [W/(VmK)]

表10 感度

(3)総括正確度 B_r ・総括精密度 S_r

式(23),(24)を用いて,総括正確度 *B*,および総括精密度 *S*,を求める. これらを求めるにあたって,表 10の値を使って,(_iB_i)²を準備として求める.求めた結 果を表 11 に示す.

表11 総括正確度 *B*, および総括精密度 *S*, を求める準備

i	(_i B _i) ² [$W^2/(m^2 \cdot K^2)]$	$($ $_{i}$ S $_{i}$) ² [V	$V^2/(m^2 \cdot K^2)]$
	測定1	測定2	測定1	測定2
1	47.27938 × 10 ⁻¹⁰	34.29274 × 10 ⁻¹⁰	14.20483 × 10 ⁻⁹	10.30306 × 10 ⁻⁹
2	6.17771 × 10 ⁻¹⁰	5.85398 × 10 ⁻¹⁰	1.856059 × 10 ⁻⁹	1.758796 × 10 ⁻⁹
3	59.21303 × 10 ⁻¹⁰	57.33518 × 10 ⁻¹⁰	32.2382 × 10 ⁻⁹	31.21582 × 10 ⁻⁹
4	231.9529 × 10 ⁻¹⁰	224.4004 × 10 ⁻¹⁰	92.78116 × 10 ⁻⁹	89.76016 × 10 ⁻⁹
5	482.6809 × 10 ⁻¹⁰	466.9921 × 10 ⁻¹⁰	193.0724 × 10 ⁻⁹	186.7968 × 10 ⁻⁹
6	18.4041 × 10 ⁻¹⁰	15.12821 × 10 ⁻¹⁰	7.860596 × 10 ⁻⁹	6.461427 × 10 ⁻⁹
合計	845.708 × 10 ⁻¹⁰	804.0026 × 10 ⁻¹⁰	342.0132 × 10 ⁻⁹	326.2961 × 10 ⁻⁹

表 11 の値を式(23),(24)に代入すれば,総括正確度 B,および総括精密度 S,が求まる.

$$(23) \Leftrightarrow B_{r1} = \sqrt{\sum_{i}^{T} (\theta_i \cdot B_i)^2} = \sqrt{845.7 \times 10^{-10}} = 2.908 \times 10^{-4} \quad [W/(\mathbf{m} \cdot \mathbf{K})]$$
$$B_{r2} = \sqrt{\sum_{i}^{T} (\theta_i \cdot B_i)^2} = \sqrt{804.0 \times 10^{-10}} = 2.835 \times 10^{-4} \quad [W/(\mathbf{m} \cdot \mathbf{K})]$$

$$(24) \Leftrightarrow S_{r1} = \sqrt{\sum_{i}^{T} (\theta_i \cdot S_i)^2} = \sqrt{342.0 \times 10^{-9}} = 5.848 \times 10^{-4} \quad [W/(\mathbf{m} \cdot \mathbf{K})]$$

$$S_{r2} = \sqrt{\sum_{i}^{T} (\theta_i \cdot S_i)^2} = \sqrt{326.3 \times 10^{-9}} = 5.712 \times 10^{-4} \quad [W/(m \cdot K)]$$

- (4) 不確かさ
- 以上より,不確かさ区間 _{r RSS} は式(22)より, (22) ⇔ $\lambda_{rRss} = \sqrt{B_r^2 + (tS_r)^2}$

$$\lambda_{rRss1} = \sqrt{B_{r1}^{2} + (tS_{r1})^{2}} = \sqrt{845.7 \times 10^{-10} + 2^{2} \times 342.0 \times 10^{-9}}$$
$$= 1.205 \times 10^{-3} \quad [W/(m \cdot K)]$$

$$\lambda_{rRss2} = \sqrt{B_{r2}^{2} + (tS_{r2})^{2}} = \sqrt{804.0 \times 10^{-10} + 2^{2} \times 326.3 \times 10^{-9}}$$

= 1.177 × 10⁻³ [W/(m · K)]

(5) グラフの作成

先ほどの(4)で得られた不確かさ結果と,5.3節(3)で得た伝熱係数 および以下 に示す文献値¹⁾とを比較するため,グラフを作成する.

表 12 に文献値で得たスピンドル油の熱伝導率の値を,そして測定で得られたの値および不確かさを図8に示す.

温度 T[K]	熱伝導率 [W/(m·K)]	
300	0.144	
320	0.143	
340	0.142	
360	0.140	
380	0.139	
400	0.138	

表9 文献値で得たスピンドル油の熱伝導率



7. 検討・考察

結果として,測定で得られた熱伝導率の不確かさと有効数字を考慮した値は,

 $\lambda_{T=296[K]} = 125 \pm 1$ [mW/(m・K)], $\lambda_{T=329[K]} = 123 \pm 1$ [mW/(m・K)] となった.これに対し,文献値¹⁾で得たスピンドル油の熱伝導率の値は表9(p.22)に もあるように 300K で = 144[mW/(m・K)], 320K で = 143[mW/(m・K)]であり,

$$\begin{cases} \frac{144 - 125}{144} \times 100 = 13.2 \quad [\%] \\ \frac{142.5 - 123}{142.5} \times 100 = 13.7 \quad [\%] \end{cases}$$

と,13%以上の値のズレがある.それに対して不確かさでは,

$$\begin{cases} \frac{\lambda_{rRSS1}}{\lambda_1} \times 100 = 0.967 \quad [\%] \\ \frac{\lambda_{rRSS2}}{\lambda_2} \times 100 = 0.958 \quad [\%] \end{cases}$$

と,ともに1%未満である.したがって何らかの測定の誤りがあった可能性が高い.したがって,測定値について検討をしてみる.

まず,加熱細線抵抗値について検討してみる.

今回の実験では R₀の測定はそれぞれ一回ずつであった.また実験中 R₀を測定する際, 数値が変動して測定に支障をきたしたことを考えると,この R₀の測定値は誤差をもたらす 要因になることが十分に考えられる. 例えば,ある測定を複数回行ったとする.各測定値x_iの平均値xはどのような誤差を持つのであろうか.n組の測定によって得られたn個の平均値を考えると,やはり誤差を含んで真の値のまわりに分布している.しかし平均値は各測定値よりも真の値に近くなっていることを考えると,平均値は各測定値より狭い範囲に分布することが容易に想像できる.実際に平均値のもつ平均誤差 snは,

$$s_n = \sqrt{\frac{1}{n(n-1)}} \sum_{i=1}^n \left(x_i - \overline{x}\right)^2 = \frac{1}{\sqrt{n}} s$$
 (27)

となることが知られている.例えば5回測定の平均分布を考えると,図9²⁾に示すように, 平均値の誤差分布の変曲点 sn は $s/\sqrt{5}$ となり,各誤差曲線に比べ鋭くなる.式(27)からも分 かるとおり,平均値の平均誤差 sn は s に対して $1/\sqrt{n}$ の割合で減少していく.その様子を図 $10^{2)}$ に示す.図10を見てもわかるとおり,測定値の平均誤差 s に対して平均値の平均誤差 sn は最初の回数の測定によって急速に減少し,約10回以上の測定回数では減り方が緩やか になる.このように,平均値の平均誤差 sn は式(27)で求めることができ,測定は10回程度 行うことが効果的であることがわかる.



図10 平均値の平均誤差の測定回数依存性²⁾

したがって,今回の測定の加熱細線抵抗値 Roは 10 回程度計測し,その平均値を Roとして測定を行うべきではなかったのではないかと考える.

ところで,今回使用した使用した加熱細線はタングステン線である.タングステンの物理 特性値³⁾の電気抵抗率は 293[K]で 5.55[µ · cm], 300[K]で 5.65[µ · cm], 400[K]で 8.00[µ · cm]である. したがって,これらの値を用いて dR/dT を求めると,

$$R_{T=293K} = 5.55 \times 10^{-6} \times 4.090 / \left(\frac{5 \times 10^{-4}}{2}\right)^2 \pi = 116 \quad [\Omega]$$

$$R_{T=300K} = 5.65 \times 10^{-6} \times 4.090 / \left(\frac{5 \times 10^{-4}}{2}\right)^2 \pi = 118 \quad [\Omega]$$

$$R_{T=400K} = 8.00 \times 10^{-6} \times 4.090 / \left(\frac{5 \times 10^{-4}}{2}\right)^2 \pi = 167 \quad [\Omega]$$

$$\therefore \quad \left(\frac{dR}{dT}\right)_1 = \frac{R}{T} = \frac{118 - 116}{300 - 293} = 0.304 \quad [/K]$$
$$\left(\frac{dR}{dT}\right)_2 = \frac{R}{T} = \frac{167 - 118}{400 - 300} = 0.490 \quad [/K]$$

これらより次図のように R-T 直線を示した図 11 が得られる.ここで,比較のために図5で 得た測定値のグラフも付け加えておく.



いま, 仮に T=296[K]のときの, 文献値の抵抗値を式(15)に代入する.

T=296[K]のときの文献値の R の値は直線補間より求めて(図 11 の R=0.304T+26.6 に代入 して), R=117[]であるので,これを式(15)の R₀と dR/dT に代入する.ただし, R₀ および dR/dT 以外は測定値を用いる.

$$(15) \Leftrightarrow \lambda = \frac{R_0 SE^3}{4\pi l (R_0 + S)^4} \cdot \frac{dR}{dT} \Big/ \frac{dV}{d\ln t}$$
$$= \frac{117 \times 2005.7 \times 14.5676^3}{4 \times \pi \times 0.04090 \times (117 + 2005.7)^4} \cdot \frac{0.304}{4.355 \times 10^{-4}}$$
$$= 0.0485 \quad [W/(m \cdot K)]$$

 $\lambda_1 > \lambda$ であるため,文献値 ¹⁾と比べてさらに差が広がってしまった.この結果より,R₀ だけに原因があるのではなく,SやE,Vの測定値にも問題があるのではないかと推測できる.

したがって,推測の私の考えとしては,ホイーストンブリッジ回路もしくは計測器に何か 不具合がありそのために測定値と文献値に大きな差が出たと考える.

8. 実験で得られたもの

正しい熱伝導率は得られなかった.実験自体も数秒で終わってしまうようなものであり, 自分自身は何も活動してはいなかったので,実験中に何か得るような状況ではなかった.し いて言うなら,7節の検討で述べたとおり,測定値が変動する加熱細線熱伝導率 Roやブリ ッジ抵抗値 S は,複数回計測して平均値を測定値とすべきではなかったのではないだろう か.また,回路を安定させる際も,値が常に変動していたため,実際に測定する時点で安定 状態にあったかどうかは,かなり疑問を感じる物理学実験にしても機械工学実験にしても, 今までは「うまくいく実験」しかテーマにならず,そのため,そのあたりの検討法を与えら れていれば,得るものもあったかもしれない.いずれにしても,完成された実験で得るもの があるとは到底思えない.この実験は,単に報告書の作成方法および得られた数値の検討お よび考察方法の学習が主な目的であるため,その趣旨に関しては得たものは大きい.

余談ではあるが,熱の伝わり方(伝熱)を温度を計測しないで求めることができるのには 意外な感じを受けた.

 WARREN H. GIEDT / 横堀 進・久我 修 共訳 基礎伝熱工学 (1960) 丸善株式会社 P326・付録 『表 A.4 スピンドル油の性質』 日本機械学会「伝熱工学資料」より
 2)物理学実験 (1998) P.18 学術図書出版

3) http://www.sunric.com/filea/siryo_1/

全般的について 「結果の整理と検対事項」に	
表紙(実験日,提出日,グループ等)	1. 式の導出
緒言	2. dR/dT のグラフ
理論	3. dV/dlnt のグラフ
実験方法	 4. λのグラフ
参考文献(書き方、引用方法は間違っていないか)	 文献値の調査
考察に矛盾はないか	 不確かさの算出
再提出の場合	 結果の考察
指示のあった提出日以内か	8. 得られたこと (10 行以上)